

学生が捉えた成人看護学実習の評価と評価に関連する要因

市川裕美子 坂本弘子 佐藤真由美 木村紀美

要旨

成人看護学実習の評価の実態と評価に関連する因子を明らかにすることを目的とし、3年生83名を対象に、実習で受け持った患者数他と実習満足度および授業評価スケール（看護実習用）を使用し質問紙調査を行った。有効回答率は85.4%であり、学生の半数は実習中成人期にある患者1名を継続して受け持っていた。実習満足度は7.37（±1.47）で、授業評価スケールは中得点領域が最も多く、すべての下位尺度は基準平均点より高い値を示していた。下位尺度2項目は、実習満足度と正の相関が認められた。成人看護学実習は、平均的な実習よりやや高い評価を得た。しかし、教員や看護師の関わり方や教員と看護師間の指導調整の改善の必要性があることなどが示唆された。

キーワード：成人看護学実習 授業評価スケール 授業評価

I. はじめに

看護学教育のカリキュラムの中には、臨地実習が必修科目として組み込まれる。その目的は、看護実践活動が展開される場における体験を通して、これまで学んだ看護学の知識・技術・態度および倫理についての理論と実際の統合、さらに、対象者を総合的に理解し看護を実践する基礎的な能力を養うことである。また、厚生労働省における看護教育の内容と方法に関する検討会では、効果的な臨地実習のあり方について打ち出している（厚生労働省、2011）。近年の人口構造や医療を取り巻く環境の変化により、実習環境も変化しており、学生が看護についての考え方を深め、実践能力を向上させていくことができるように、教員が教育方法を常に見直すことや学生の実習の看護経験を一緒に振り返ることで、教育の質を高めることが求められている。

A大学短期大学部の成人看護学実習は、3

年次に成人看護学実習I（急性期、回復期）、成人看護学実習II（慢性期、終末期）の経過に応じた看護の枠組みで各3週間の実習を行っている。これまで、成人看護学実習において、学生が実習をどのように捉え評価しているのか調査したことはなかった。そこで、舟島他（2016）の看護学生の実習について評価基準を網羅し学生の視点を反映した(p.160)、授業過程評価スケール（看護学実習用）を用い、成人看護学実習について学生の評価を得ることとした。本研究は、実習の評価と評価に関連する要因は何かを明らかにし、今後の成人看護学実習の方法や内容、指導方法などへの示唆を得て、実習の質向上につなげることである。

II. 研究目的

学生の成人看護学実習の評価と評価に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象者と調査期間

平成 29 年度成人看護学実習を履修した、A 大学短期大学部看護学科 3 年生 83 名を対象とした。平成 29 年 12 月に対象学生に調査用紙を配布し、10 日間の留め置き法により回収を行った。

2. 調査内容と測定スケール

1) 成人看護学実習における受け持ち患者数と、成人期にある 15 歳から 64 歳までの患者を受け持ったかについて記入する。

2) 2 回の成人看護学実習における総合的な実習満足度について、「非常に不満足である」1 点から「非常に満足である」10 点までの目盛りを連続線上に配点し、該当する点数に丸を記入する。

3) 授業過程評価スケール(看護学実習用)(舟島他, 2016, p161)を用い、成人看護学実習における評価を記入する。授業過程評価スケール(看護学実習用)(以下、スケール)は、10 の下位尺度、42 の質問項目によって実習過程を評価するものである。

スケールの信頼性・妥当性は検証済みであり、使用にあたっては使用許諾を受け実施した。

3. 分析方法

1) 2 回の実習での受け持ち患者数、成人期にある患者を受け持ったかと患者の年代を単純集計した。次に実習満足度の平均得点を算出し、6 点以上と 6 点未満の人数と%を求めた。

2) スケールは、項目それぞれの平均得点と下位尺度ごとの平均得点を算出する。その後下位尺度の平均得点合計を求めた。次にクロンバック α 係数を求め、内的整合性を確認した。

3) スケールの下位尺度と実習満足度の関連について、Spearman 順位相関係数を求めた。また、スケールの下位尺度と受け持ち患者数 2 名と 2 名以上、成人期にある患者を受け持ったか、さらに、実習満足度 6 点以上と 6 点未

満との関連は Mann-Whitney 検定を行った。すべての統計処理には SPSS23.0 を使用し、有意水準は 5%未満とした。

4. 倫理的配慮

学生には、研究目的および趣旨と研究参加への自由意思の尊重、調査は無記名であり、収集されたデータは統計的な処理を行い個人が特定されないこと、本研究以外に使用しないことを文書と口頭で説明した。また、実施の時期は成人看護実習評価点を学生個々に示した後に実施し、成績には一切影響のないことを説明した。調査用紙への回答をもって同意を得たものとした。本研究は、八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号: 17-13)。

Ⅳ. 結果

1. 回収数と受け持ち患者数、成人期にある患者を受け持ったかと患者の年代

調査時に欠席していた 1 名を除いた 82 名に質問紙を配布した。70 名から回答があり、すべて有効回答(有効回答率 85.4%)であった。

学生の成人看護学実習 I と II における延べ受け持ち患者数は 190 人で、学生 1 名が 2 回の実習で受け持った延べ患者数は、2 人が 35 名(50%)、3 人が 25 名(35.7%)、4 人以上が 10 名(14.3%)であった。成人期にある患者を受け持った学生は 39 名(55.7%)で、受け持たなかった学生は 31 名(44.3%)であった。成人期にあった患者の延べ数は 48 人(25.3%)で、その年齢は 50 歳代と 60~64 歳が多かった[複数回答](表 1)。

2. 成人看護学実習の実習満足度

2 回の成人看護学実習における総合的な実習満足度について、「非常に不満足である」1 点から「非常に満足である」10 点までとし、記入してもらった結果は、最小値 4 点から最大値 10 点で、平均得点 7.37 点(±1.47)であった(表 1)。

表1 受け持ち患者数と成人期の患者を受け持ったか、実習満足度

		n=70	
属性		人数	%
2回の実習で受け持った患者数	2人	35	50
	3人	25	35.7
	4人	6	8.6
	5人	3	4.3
	6人	1	1.4
成人期にある患者を受け持ったか	はい	39	55.7
	いいえ	31	44.3
【成人期にあった患者の年齢 (n=48)】	30歳代	6	12.5
	40歳代	6	12.5
	50歳代	18	37.5
	60～64歳	18	37.5
実習満足度	平均得点	7.37 (±1.47)	
	得点範囲	0～10.0	
	6点以上	62	88.6
	6点未満	8	11.4

3. スケールの平均得点

本調査でのスケールのクロンバック α 係数は、尺度全体で.97と高値であり、内的整合性を確認し信頼性が認められた。各下位尺度のクロンバック α 係数は表2に示した。

スケールによる成人看護学実習評価総得点（得点範囲：42点～210点）の平均は、165.3点（±22.2）であった。各下位尺度の平均得点で4.00点以上の高値を示した順に、【オリエンテーション】、【学生－患者関係】、【実習記録の活用】、【教員、看護師－学生相互行為】であった。最も低値を示したものは、【教員、看護師間の指導調整】であった。項目別得点の平均で高値を示したものは、「教員や看護師は、実習カンファレンスに参加していた」、「受け持った患者の看護を中心に実習を展開できた」、「必要に応じてオリエンテーションを受ける機会があった」の順であった。最も低値を示していた項目は、「教員と看護師の指導の間に一貫性があった」であり、次に「教員と看護師の連携がよく取れていた」、「教員や看護師が学生に期待する行動は難しすぎることもやさしすぎることもなかった」の順であった（表2）。本調査におけるスケールの各得点領域は、高得点領域の学生21名（30.0%）、中得点領域の学生39名（55.7%）、低領域の学

生10名（14.3%）であった（舟島他，2016，p166-167）（表3）。

4. スケールの下位尺度と実習満足度の関連

スケールの下位尺度と実習満足度では、【実習記録の活用】（ $r=.47, p<.001$ ）、【教員、看護師－学生相互行為】（ $r=.42, p<.001$ ）で、正の相関が認められた。その他8つの下位尺度では、いずれも低い正の相関が認められた（表4）。

5. スケールの下位尺度と受け持ち患者数2名と2名以上、成人期にある患者を受け持ったか、実習満足度6点以上と6点未満との関連

1) スケールの下位尺度と受け持ち患者数2名と2名以上では、いずれも関連はなかった。また、成人期にある患者を受け持ったかでも関連はなかった。

2) 実習満足度との関連は、実習満足度が6点以上の学生は、【オリエンテーション】（ $U=139.00, p=.034$ ）、【学習内容・方法】（ $U=94.00, p=.004$ ）、【学生－患者関係】（ $U=128.00, p=.022$ ）、【教員、看護師－学生相互行為】（ $U=125.00, p=.023$ ）、【実習記録の活用】（ $U=98.00, p=.004$ ）、【学生－人的環境調整】（ $U=82.00, p=.002$ ）の6項目において有意に高かった。

表2 授業過程評価スケール42項目の平均得点 (SD) および各下位尺度の平均得点 (SD) と信頼性

		n=70			
下位尺度項目	質問項目	平均得点 (点) (SD)	下位尺度 別平均得 点 (点) (SD)	※基準 平均点 (点)	α 係数
I. オリエンテーション	1 必要に応じてオリエンテーションを受ける機会があった	4.17 (0.68)	4.16 (0.58)	3.5	.65
	2 オリエンテーションの内容は、実習を円滑に行うために役立った	4.14 (0.67)			
II. 学習内容・方法	3 受け持った患者の看護を中心に実習を展開できた	4.19 (0.69)	3.91 (0.55)	3.7	.82
	4 学習目標としていた援助を受け持ち患者に行うことができた	3.81 (0.73)			
	5 受け持ち患者に対し、計画・実施・評価の一連の流れに沿って実習を行うことができた	4.07 (0.73)			
	6 今までの学習内容を活用しながら実習を展開できた	3.86 (0.80)			
	7 患者への理解を深め、個性を考えながら実習を展開していた	3.81 (0.79)			
	8 日々の学習内容を振り返りながら、それを生かして実習を展開できた	3.74 (0.76)			
III. 学生-患者関係	9 患者とのコミュニケーションを深めながら実習を展開していた	4.10 (0.80)	4.10 (0.75)	4.0	.87
	10 患者との関係を築きながら実習を展開していた	4.10 (0.80)			
IV. 教員、看護師-学生 相互行為	11 教員や看護師は学生の必要に応じてアドバイス・指導・説明などを行っていた	4.14 (0.79)	4.00 (0.67)	4.0	.95
	12 教員や看護師は、学生の意見を認めたくらんで、アドバイスや指導を行っていた	4.11 (0.81)			
	13 教員や看護師の説明は、具体的でわかりやすかった	4.01 (0.73)			
	14 教員や看護師は、学生が困っている時に助けてくれた	4.04 (0.88)			
	15 教員や看護師は、学生の個性に合わせて指導していた	3.99 (0.84)			
	16 教員や看護師は、学生を一人の人間として尊重していた	4.01 (0.88)			
	17 教員や看護師は、どの学生にも平等に接していた	3.89 (0.94)			
	18 教員や看護師は、学生に真剣にかかわっていた	4.13 (0.83)			
	19 教員や看護師は、先入観を持たずに学生に接していた	3.81 (0.94)			
	20 必要に応じて、教員や看護師に質問することができた	3.71 (0.89)			
	21 教員や看護師は、学生の質問にわかりやすく答えていた	3.96 (0.82)			
	22 教員や看護師は、学生が自分の考えに基づいて行動することを尊重していた	3.93 (0.87)			
	23 看護師の患者に対する態度から学ぶ機会が多い実習であった	3.99 (0.88)			
	24 教員や看護師は、実習カンファレンスに参加していた	4.23 (0.34)			
V. 学生への期待・要求	25 教員や看護師の学生に対する質問の量は多すぎることでも少なすぎることでもなかった	3.83 (0.80)	3.73 (0.82)	3.5	.89
	26 教員や看護師が学生に期待する行動は難しすぎることでもやさしすぎることでもなかった	3.63 (0.92)			
VI. 教員、看護師間の指 導調整	27 教員と看護師の連携がよく取れていた	3.63 (0.85)	3.51 (0.79)	3.4	.77
	28 教員と看護師の指導の間に一貫性があった	3.40 (0.91)			
VII. 目標・課題の設定	29 目的目標が明確に伝わる展開の実習であった	3.77 (0.82)	3.78 (0.63)	3.4	.78
	30 学習課題とその必要性が理解しやすい実習であった	3.79 (0.75)			
	31 実習中の記録物・提出物などの量は適切であった	3.77 (0.82)			
VIII. 実習記録の活用	32 教員や看護師は、提出した記録物を用いて指導・説明していた	3.99 (0.75)	4.03 (0.69)	3.9	.85
	33 記録物や提出物に対して、指導・助言があった	4.07 (0.73)			
IX. カンファレンスと時 間調整	34 教員が実習時間をむやみに早めることや、終了時間を延長・短縮することはなかった	4.04 (0.86)	3.90 (0.72)	3.9	.82
	35 状況に合わせて休憩時間をとれた	4.03 (0.93)			
	36 カンファレンスの時間は長すぎることでも短すぎることでもなかった	3.71 (0.96)			
	37 カンファレンスにより、実践した内容を意味づけることができた	3.83 (0.80)			
	38 学生同士が協力し合うことができた	4.13 (0.78)			
X. 学生-人的環境調整	39 教員と学生間のコミュニケーションはよかった	3.91 (0.85)	3.98 (0.66)	3.9	.86
	40 実習では、他の医療従事者の協力を得られた	3.90 (0.87)			
	41 教員は、学生が患者とうまくかかわれるように配慮していた	4.06 (0.74)			
	42 教員は、学生がスタッフとうまくかかわれるように配慮していた	3.90 (0.85)			
計		165.30 (22.2)	39.10 (5.16)	37.2	.97

※は舟島他の調査から抽出された各下位尺度の項目平均点

表3 高・中・低得点領域における各下位尺度の平均点

項目	n=70		
	低得点領域	中得点領域	高得点領域
人数(%)	10(14.3)	39(55.7)	21(30.0)
総得点(SD)	128.00(7.01)	161.05(10.25)	191.09(7.07)
下位尺度 得点(SD)			
I. オリエンテーション	3.85(0.34)	4.04(0.54)	4.52(0.58)
II. 学習内容・方法	3.37(0.29)	3.81(0.35)	4.37(0.61)
III. 学生－患者関係	3.35(0.75)	3.96(0.65)	4.71(0.44)
IV. 教員、看護師－学生相互行為	2.95(0.27)	3.90(0.45)	4.68(0.29)
V. 学生への期待・要求	2.70(0.42)	3.58(0.59)	4.50(0.61)
VI. 教員、看護師間の指導調整	2.55(0.60)	3.50(0.67)	4.00(0.67)
VII. 目標・課題の設定	2.87(0.32)	3.68(0.40)	4.38(0.45)
VIII. 実習記録の活用	3.10(0.21)	3.95(0.55)	4.62(0.50)
IX. カンファレンスと時間調整	2.96(0.38)	3.78(0.57)	4.58(0.42)
X. 学生－人的環境調整	2.98(0.27)	3.87(0.43)	4.66(0.31)

表4 各下位尺度と満足度との相関

下位尺度項目	n=70		
	満足度		
	r 値	p 値	
I オリエンテーション	.27	.023	*
II 学習内容・方法	.28	.018	*
III 学生－患者関係	.36	.002	**
IV 教員、看護師－学生相互行為	.42	.000	***
V 学生への期待・要求	.27	.029	*
VI 教員、看護師間の指導調整	.26	.029	*
VII 目標・課題の設定	.30	.013	*
VIII 実習記録の活用	.47	.000	***
IX カンファレンスと時間調整	.33	.005	**
X 学生－人的環境調整	.39	.001	**

Spearman順位相関係数
* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

V. 考察

本調査の結果は、成人看護学実習評価において、舟島他(2016, p166)で示されている得点領域により、中得点領域の学生が55.7%で最も多く、高得点領域は30.0%、低得点領域は14.3%にあった。また、各下位尺度の得点も基準平均得点より高い値を示していることから、全体的に概ね平均的な実習よりやや高い評価を得たと考える。

1. スケール下位尺度項目の学生評価

本調査において平均得点が4.00以上であった【オリエンテーション】、【学生－患者関係】、【実習記録の活用】、【教員、看護師－学生相互関係】と、低値を示した【教員、看護師間の指導調整】、【学生への期待・要求】について考察する。

【オリエンテーション】は、オリエンテーションの必要性に対する学生の期待と実際の状況

との一致や内容の適切性の評価である。成人看護学実習オリエンテーションは、実習要項に沿った説明のほか、看護過程、記録方法、各施設病棟の特色と事前学習ポイントなどを説明している。実習直前にはその理解度などを担当教員が確認し、実習中にも必要時説明をしている。項目別得点でも「必要に応じてオリエンテーションを受ける機会があった」は得点が高かった。先行研究では最も高値を示している報告はなく、本調査では実施したオリエンテーションが適切に行われたと評価できる。しかし、学生が実習において様々な困難を体験しているとの報告は多く、学生の多大なストレスや不安、緊張、リアリティショックの軽減のためにも、今後もオリエンテーションの内容と方法をさらに検討しながら、必要に応じたオリエンテーションを実施していくことが重要であると考えられる。

【学生－患者関係】は、学生と患者のコミュニケーションや関係性の評価である。直成他(2012, p40)や原島・直成・小幡・片田・狩谷(2016, p51)の研究においても高値を示しており、本調査でも同様の結果であった。成人看護学実習では、患者選定を臨床指導者に依頼しているが、実習の目的や目標に見合った患者を選定していただいていることで、学生は患者を受け持ち、援助を通し患者理解や関心を深めて信頼関係を築けたことが伺えた。また、ひとりの患者にじっくりとかわることができ、患者との関係性やコミュニケーションが深められたことが、達成感や満足感へつながり評価に影響したと考えられる。しかし、学生は患者の思いに寄り添うことはまだまだ不十分であると考えられるため、今後も患者の訴えに耳を傾け、患者の思いに寄り添うことができるよう育成、実習指導を行うことが必要と考えられた。

【実習記録の活用】は、実習の提出物や記録物についての教員や看護師の説明や助言についての評価である。成人看護学実習では、思考過

程や問題解決能力を育むため看護過程の展開を重視している。学生は、日々の振り返り用紙にその日のケア内容やアセスメントおよび評価を記入し自己の振り返りを行っている。教員は記録を確認し、助言・指導を繰り返し行っている。看護問題や看護計画の妥当性についても、毎日のカンファレンスと実習期間中に行うケースカンファレンスやテーマカンファレンスの機会を利用し、助言・指導を行っている。そのような看護師や教員の関わりが、3週間の実習の中で実習記録を活用できたという評価につながったものと考えられる。しかし、「カンファレンスにより、実践した内容を意味づけることができた」は3.83(±.80)であり、カンファレンスの方法や内容については、今後さらに検討していく必要があると考えられる。

【教員、看護師－学生相互行為】は、実習における教員、看護師の学生に対する対応の適切性、看護師の患者に対する態度から学ぶ機会の量、教員や看護師のカンファレンスへの参加度を測定する。教員は学生の受け持ち患者について、直接もしくは間接的な方法により情報を収集し問題を発見し、学生の理解が深まるように知識の活用などを指導している。また、必要時は学生と一緒にケアにあたるなど、学生が看護展開できるように支援している。このようなことから、学生は実習経験から看護実践能力が高まり、体験した看護を看護師の患者に対する態度から自ら学ぶことができるようになってきていると考えられる。

しかし、「必要に応じて、教員や看護師に質問することができた」は3.71(±0.89)と低く、教員や看護師の関わり方に改善の必要性があることも示唆された。実習は教員や看護師の臨床能力に影響を受ける科目であり、看護実践者としてのロールモデルとなれるよう資質の向上に努めることが必要である。

【教員、看護師間の指導調整】は、教員と看護師間の指導の一貫性と連携の適切性を評価するものである。また、【学生への期待・要求】

は、教員と指導者が学生に期待する難易度を示すものである。項目別得点の平均値で最も低値を示していた項目は、「教員と看護師の連携がよく取れていた」、「教員や看護師が学生に期待する行動は難しすぎることもやさしすぎることもなかった」であった。【教員、看護師間の指導調整】は、直成他（2012, p40）や松永他（2014, p78）の研究でも低値を示していた。A大学短期大学部では、実習施設へは事前に実習要項を示しながら説明は行っているが、学生のレディネスの説明が十分とは言えず、実習施設へ浸透されていないことが要因として考えられる。また、堤・糸井・河村（2007）は、成人看護学実習における看護師と教員の役割が異なることを指摘し、学生のレディネスを把握しつつ、学生がどのようにわかっていくかについても共通理解していく必要があると述べている（p234-p235）。教員と看護師の学生に対する具体的な役割を明確にし、互いに理解することが重要と考える。さらに、実習病棟への学生のレディネスの説明は【学生への期待・要求】にも影響すると考えるため、教員と指導者間で具体的な打ち合わせと、実習期間中でも頻繁な情報交換や共有をすることで統一した実習指導につながると考える。

2. 学生の評価に関連する要因

スケールの下位尺度と実習満足度では、【実習記録の活用】、【教員、看護師—学生相互行為】の2つで正の相関が認められた。その他8つの下位尺度では、いずれにも低い正の相関が認められた。実習における実習記録の活用により問題解決能力が高まり、学習目的や学習目標が明確になり効果的に学習課題に取り組むことができたと考えられる。教員、看護師から適切な対応や助言・指導を受けたことや、看護師の患者に対する態度から学ぶ機会の量、教員や看護師のカンファレンスへの参加が学生評価に影響していたと考えられた。

また本調査では、スケールの下位尺度と受け持ち患者数および、成人期にある患者を受

け持ったかでは関連はなかった。しかし、実習環境は変化してきており、3週間の実習で複数の患者を受け持つことは容易に推察されることから、必要に応じたオリエンテーションや既習内容の活用、到達目標を明確にして助言・指導していくことが必要と考える。

さらに、実習満足度が6点以上の学生は、【オリエンテーション】、【学習内容・方法】、【学生—患者関係】、【教員、看護師—学生相互行為】、【実習記録の活用】、【学生—人的環境調整】の6つの下位尺度において有意に得点が高かった。北林・矢島・秋山・板垣（2004）は、成人看護実習における看護学生の満足感を構成する要素には、良好な人間関係・看護の実践性・看護観の成長であると述べている（p26）。本調査でも、受け持ち患者とのコミュニケーションが深められたことで信頼関係を築け、看護過程を展開しながら思考プロセスを学び、実際の看護援助やその評価によって自ら学習成果を捉えることができたのではないかと考える。これまで以上に、学生の実習の達成感や満足度を高めることができるような教員や看護師の関わりについて検討しながら、助言・指導をしていくことが重要である。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究は平成29年度1回のみの調査で得られたものであり、一般化するには限界がある。しかし、概ね先行研究と同様の結果もあり今後も継続して調査を行い、実習の質向上に向けて検討していく必要がある。

VI. 結論

1. 成人看護学実習において、半数の学生が3週間を通して1人の患者を受け持ち、成人期にある患者を受け持っていた。
2. 成人看護学実習の満足度は、1～10点の範囲で平均得点 7.37 点（±1.47）であった。
3. スケールの総得点平均は、165.3 点（±22.2）で中得点領域にあった。下位尺度の平均得点

は、【オリエンテーション】、【学生－患者関係】、【実習記録の活用】、【教員、看護師－学生相互行為】が 4.00 点以上であった。最も低値を示したものは、【教員、看護師間の指導調整】であった。

4. スケールの下位尺度と実習満足度では、【実習記録の活用】、【教員、看護師－学生相互行為】で正の相関が認められ、その他 8 つの下位尺度では、いずれも低い正の相関が認められた。

5. スケールの下位尺度の得点は、受け持ち患者数と患者の年代とは関連がなかった。実習満足度が 6 点以上の学生は、【オリエンテーション】、【学習内容・方法】、【学生－患者関係】、【教員、看護師－学生相互行為】、【実習記録の活用】、【学生－人的環境調整】において有意に高かった。

謝辞

本調査にご協力いただきました A 大学短期大学部看護学生ならびに、関係者の皆様から心より感謝いたします。

利益相反の開示

本研究における利益相反は存在しない。

著者貢献度

すべての著者は、研究の構想およびデザイン、データ収集・分析および解釈に寄与し、論文の作成に関与し、最終原稿を確認した。

文献

舟島なをみ監修 (2016). 看護実践・教育のための測定用具ファイル開発過程から活用の実際まで第 3 版. 160-168, 東京:医学書院.
原島利恵, 直成洋子, 小幡明香, 片田裕子, 狩谷恭子 (2016). 成人看護学実習と総合実習 (成人) の学生による実習評価－授業過程評価スケール (看護学実習用) を用いて－. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 8 (1),

47-55.

北林司, 矢嶋和江, 秋山美加, 板垣喜代子 (2004). 成人看護学実習における看護学生の満足感を構成する要素の分析. 群馬パース学園短期大学紀要, 6 (1), 21-27.

厚生労働省 (2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書平成 23 年 2 月 28 日. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf> (参照平成 30 年 1 月 11 日).

松永早苗, 今井恵, 千田美紀子, 井上美代江, 辻俊子, 井上照代, 上野範子, 森下妙子 (2014). A 大学基礎看護学実習 I の実習過程評価. 聖泉看護学研究, 3, 75-81.

森初美, 西村伸子 (2011). A 大学看護学科成人看護学実習における学生評価に対する指導の在り方の検討. 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 14 (1), 31-36.

中本明世, 伊藤朗子, 山本純子, 松田藤子, 門千歳, 横溝志乃 (2015). 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状態による困難感の比較－基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して－. 千里金蘭大学紀要, 12, 123-134.

直成洋子, 前田和子, 橋本歩美, 原島利恵, 山岸千恵, 富田真弓, 石鍋圭子 (2012). 成人看護学実習の学生による評価－授業過程評価スケール (看護学実習用) を用いて－. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 4 (1), 35-45.

柘野浩子, 塩見和子, 小野晴子 (2011). 成人看護学実習の実習指導に対する学生の授業評価－授業評価スケール活用の予備的調査－. 新見公立大学紀要, 32, 129-135.

富澤理恵, 新井祐恵, 九津見雅美, 金田みどり, 門千歳, 福岡登美子 (2012). 臨地実習を通じた看護学生の学びの評価と A 病院における実習過程評価. 千里金蘭大学紀要, 9, 57-65.

堤かおり, 糸井裕子, 河村圭子 (2007).

成人看護学実習における教員と看護師間の
指導一貫性に関する考察. 兵庫大学論集, 12,
233-237.

執筆者紹介 (所属)

市川裕美子	八戸学院大学	看護学科	助教
木村紀美	八戸学院大学	看護学科	教授
坂本弘子	八戸学院大学	看護学科	助教
佐藤真由美	八戸学院大学	看護学科	助教